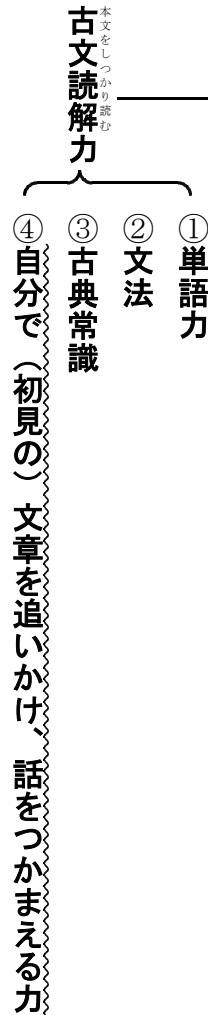


目標Ⅱ 大学入試に **△口格** すること

入試問題で (比較的) 高得点を取る

そのために必要なものは



*①②③がないと、④は積み上げられない。

① 単語：前期は【古文・知識トレーニング (ICT)】をなんとか (完璧を目指さず) こなして行く。

a また授業を通して、口頭で、プリントなどで暗記すべき古語は伝える。それもマスターしてほしい。

b 苦手な人は、「古文重要事項」38Pの「重要一六三単語」を優先するのもいいかもしれない。

c 後期以降は400〜600語程度の単語帳を繰り返し。

② 文法：前期 (後期) は【古文・知識トレーニング (ICT)】をなんとかでもマスターしていくこと。

a 講義ではアットランダムに出て来た事項を解説する。自分で高校の文法の教科書や参考書を読んで頭の中に体系的に整理していく。『古文重要事項』の該当箇所をマーカー ↓ 教科書の演習問題や文法のワークの問題を解いてみる

b 講義で触れられなかったものを補う。

③ 古典常識：各講義で説明されたことをマスターしていく。

a ハンドブック (単語帳的な) を買って持っていてよい ↓ 講義で触れたことを確認。

b 余裕があれば、夏期〜後期になんとなく読む。

④ 白ひたひたで読む力：各講義の中でじっくり。

☆「ICT」は、「文法編」と「単語・読解編」とを一気にやるのは大変かもしれない。二曜日に分けるのがおすすめ。(できるだけ早く「一週間のスケジュール」を作れ)

☆国語は「できるようになる」ことはない。「少しずつ上手になる」しかない。

A 予習・授業・復習について ↓ (たぶん) 駿台HP【マイページ】内『大学合格への指針』(各教科の学習方法)のページを参照

① 予習

a 本文を (書き込みスペースを空けて) 正確にノートに写す (写すだけでも読解力向上に役立つ)。

b とにかく自分の (今の力でいいから) 読み、設問の答を出しておく (なぜその答えにしたかの説明を用意)。

c 分からないところ (本文の分からないところ、分からない設問は「ここは分からない」と意識しておく)。

d その分からない部分について。極力調べ物 (単語を辞書で、助詞助動詞を文法書で) しよう。

② 授業

a 講師から盗めるものはすべて盗む。

b 予習で分からなかった部分、自分が間違えていた部分について「なぜそうなるのか・なぜそれが正しいのか」を理解し、自分が分からなかった理由・間違えた理由を明らかにする。

- c 板書以外でも、役に立ちそうなこと、気付いたことをノートする。
- d 『**古文重要文事項**』は毎回持参すること。

③復習

- a 講義後できるだけすぐに、その日の講義を頭の中で再現し、プリントやノートを読み返し、マスターすべきこと(単語・文法事項・構文・古典常識・テクニク等)をマスター。
- b 予習段階で分らなかった部分、間違えた箇所について、その原因をつぶす。
- c **同じ文章を何度も復習する**。一つの文章が終わった段階で、白紙のテキストを読みつつ、的確に読解できるか、論理的に解答を導けるか確認。あやふやな部分をもう一度プリントやノートに戻って復習。話を忘れた頃(三〜四週間後)にまた、さらに前期(後期)が終わった段階で前期(後期)の全ての文章を復習する。

B テキストの進め方について

- 前期：基幹編【一】〜【四】
- 共通テスト対策編【A】
- 後期：基幹編【五】
- 共通テスト対策編【D】

【一】『徒然草』

- * まずは文章を丁寧に読んでみる
- * いくつかの文法事項をマスターする。

A 用言の活用(古文読解を支える基礎の基礎)は大丈夫ですか？

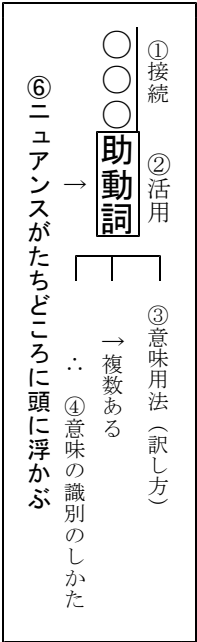
↓テキスト164P【動詞の練習題】を解くこと・制限時間4分・合格点満点
満点でない人は、HP「プリント置き場」(<https://kobun.webnode.jp/>)の「授業の補助プリント」のページにある「動詞活用五十連発」をやってください。

B		たり		り		ら		る		れ		ラ変	
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止	体	已	命	型	〔文法〕						
未	用	止											

意味：イ打消（上の語を打ち消し否定する）へーナイ
 a 仮定用法「一ずは・一ずば・一ずんば」⇨仮定もしーないならば・もしーなかったら⇨ 形容詞と似ている
 この皮衣は、火に焼かむに焼けずはこそ、まことならめと
 ⇨この皮衣は火に焼いても、もし焼けなかつたら本物だろうと……⇨

*文中に「未^レず」があつたら、へーナイを思い浮かべること

D 「助動詞の学習」



- ①②③④…暗記しなければならない
- ⑤…文法問題に答えられるように
- ⑥が大切！

E 古文では、連体形が体言（名詞）の代わりをすることがある（準体法） [構文]

*連用形が体言の代わりをすることもある

元の文 花の咲きたることが、いとあはれなりき。⇨桜の咲いていることが、実にしみじみ嬉しかった⇨

花の咲きたるさまを、見に行かむ。⇨桜の咲いている様子を、見に行こう⇨

⇨ 体言を省略

①助詞付 花の咲きたるが、いとあはれなりき。⇨桜の咲いているのが、……⇨

花の咲きたるを、見に行かむ。⇨桜の咲いているのを、……⇨

⇨ 助詞を省略

②下に「レ」、花の咲きたるレ、いとあはれなりき。⇨桜が咲いている、それが……

連体中止 花の咲きたるレ、見に行かむ。⇨桜が咲いている、それを……⇨

①②の場合、省略されている名詞や助詞を補って訳すのがよい

*古文を読んでいて準体法が使われていることはけっこう多い。今後「準体法」があれば気づくこと

ついでに

F 連用中止…文と文とを何の工夫もなく（接続助詞を使わず）つなぐ時、上の文の述部は連用形になる。

「鳥鳴く。花咲く。」⇨「鳥鳴き、花咲く」 「山高し。海深し。」⇨「山高く、海深し。」

【一】学習内容——以下のことが身に付いていますか？ 説明できますか？

□ 助動詞の学習において大切なこと

□ 助動詞「たり」「り」

□ 助動詞「ず」

□ 準体法

□ 連用中止

□ 係り結びの法則

□ 「やは」「かは」

□ 副助詞「のみ」

□ 主要な接続助詞と訳し方「ば」「ども・と」「とも」「と」「で」

□ 指示語「さ・しか」系・「かく」系

* (白紙の) 本文をもう一度通して読んで「なるほど、ここは連体形になっている、準体法だ、この部分が名詞のかたまりになっており、こう訳すのだな」と分かるかどうか確認しなさい。

※ 「用言の活用」、特に動詞の活用は古文の学習を支える土台。不十分な人(テキスト164【練習題】がちやんとできなかった人)は【動詞活用五十連発】(「プリント置き場」にあります)を是非やってみてください。

※ 予備校レベルの授業を受ける資格があるかどうか、テストをしてみよう。

裏の頁に「古文基礎の基礎テスト」があります。満点でないといけません。

出来がいまいちな人は是非「古文基礎の基礎教材」(「プリント置き場」にあります)に取り組んで下さい。

* 今後、授業前日にはプリントをHP「イクヲのプリント置き場」(<https://kobun.webnode.jp/>)にアップしておきます。なくした人は、DLしておいてください。

【訳 例】

何事も、深く知らない様子をしているのがよい。立派な人は、知っていることだからといって、そうわけ知り顔でばかり言うか、いや言いはしない。片田舎から出て来た人こそ、様々な道について心得ている様子の受け答えはする(ものだ)。だから、(いろいろなことを知っているということは)実に立派な点もあるけれど、自分でも(自分がいろんなことを知っているということを)すばらしいと思っている様子が、見苦しい。よくわかまえている道に関しては、必ず口が重く、(人が)尋ねないかぎりは(自分から)言わないのがすばらしい。

a 体 **もの・ものから・ものを** ↓ 逆接確定条件へノニ・ダガ・ケレド ↓ … 「ものグループ」

つれなくねたき **もの**の忘れがたきにおぼす。

〈無情でうらめしいけれど忘れがたいお方だとお思いになる〉

* 「ものを」は和歌の句末で、終助詞的に詠嘆へノニナア・ダナアのこともある

F へし (ク活用形容詞型活用)

接続：終止形 (ラ変型には連体形) (IIウ段音接続)

(一意味の識別の目安・目安であり絶対ではないが)

意味：ス 推量へーダロウ・シソウダ・ニチガイナイ

↑主語 || 三人称の時に多い (以下同)

イ 意志へーシヨウ・スルツモリダ

↑主語 || 「私」の時

カ 可能 (推量) へーデキル (ーデキソウダ) ↓

- ト 当然へーハズダ・ベキダ・ナケレバナラナイ
- カ 勧誘へーナサイ・シテクレマセンカ ↓

↑主語 || 「あなた (方)」

メ 適当へーガヨイ

↑主語 || 「あなた (方)」
↑主語 || 「あなた (方)」
↑主語 || 「おまえ」

ヌ 命令へーセヨ ↓

* 意味は「スイカトカメ」と覚えてね

* 疑問や反語の文中では、「可能」「推量」「可能推量」が多い。

* 文中で連体形「べき」 ↓ 「するはずの・しそうな・のがよい」という訳がはまることが多い。

* 「べし」は訳しづらい。普段は文中に「べし」があれば、なんとなくへーベキダ・ハズダ・デキルのどれかをあてはめて読んでいけばよい。設問になっていければ、立ち止まって一つ一つ当てはめて判断する。

G まじ (シク活用形容詞型活用)

接続：終止形 (ラ変型には連体形) (IIウ段音接続)

意味：ス 打消推量へーナイダロウ・シソウニナイ・ナイニチガイナイ ↓

イ 打消意志へーマイ・ナイツモリダ ↓

カ 不可能 (推量) へーデキナイ (ーデキソウニナイ) ↓

ト 打消当然へーナイハズダ・ベキデナイ・シテハナラナイ ↓

カ 制止・不適當へーシテクレルナ ↓ ナイノガヨイ ↓

メ 禁止 へースルナ ↓

「じ」が「む」の否定ならば、「まじ」は「べし」の否定 (not べし)。意味用法も「べし」の裏返し。訳も「ナイ」を付ければよい。「べし」をマスターして、応用

* 文中に「まじ」があれば、へーナイハズダ・ベキデナイ・デキナイのうちの、どれかいいのを当てはめて読んでいくこと。設問になっていければ、立ち止まって判断する。

▼ 文法教科書や問題集で、「べし」「まじ」の練習問題を解き、例文を訳し、音読し訳を思い浮かべる作業をすること。意味の識別にも十分馴れておくこと。また、「べし」や「まじ」は、短文の例文では意味を確定しにくい場合もある。いまいち納得できないような問題については質問に来ること。

H 補助動詞二つの「あふ」

四段 ↓ 「あふ」 || 複数が同じ動作 (一緒にしあう・皆でする) ↓

下二段 ↓ 「あへず」 || その動作を完了できない (しきれない・最後までできない) ↓

I けり (ラ変型活用)

接続：連用形

意味：イ 過去へー (シ) ター (シ) タトイウコトダ ↓ 伝聞過去の回想 男の来けるをへ男が来たのを ↓

ロ 詠嘆へーダッタノダナア・ダナア (俗に「気づきの『けり』」という)

a 和歌や会話文の中で「けり」。「ぞ・なむける」。「こそけり」というように、文末 (相当部) に「けり」があり、過去の話だとするとオカシイ場合は詠嘆。和歌の区切れ部にある「けり」はまず詠嘆。

今宵は八月十五夜なり **けり** と思し出でてへそいえば今夜は八月十五夜 仲秋の名月 だったのだなあ と * 文中に「けり」があると、へーシタを思い浮かべること。へーシタでおかしい時に、詠嘆を思い出すこと